

楽習^{がくしゅう}コラム

内田伸子先生からの 子育て応援メッセージ

「たのしく・あそぶ・まなぶ・そだつ」「楽習」
今回は、絵本の読み聞かせがテーマです。
子どもの成長とともに変わっていく絵本との向き合い方を、
内田先生から教えていただきます。

お話をお聞きしたのは
内田伸子先生

十文字学園理事・十文字学園女子
大学特任教授、筑波大学客員教授、
お茶の水女子大学名誉教授、学術
博士。発達心理学、認知心理学、保
育学を専門とする。著書に「子育て
に「もう遅い」はありません」(富山
房インターナショナル)など多数。



絵本で「心の栄養」補充

お悩み

「ママ読んでー」と持ってくるのは
いつも同じ一冊の絵本です。
ほかにも楽しい絵本はいろいろあるのに……
どうしたらよいでしょうか。

絵本は0歳の赤ちゃんから大
人まで、誰もが楽しめるものです。
赤ちゃんにとって、絵本と出会う
のはとてもうれしい経験です。
赤ちゃんは、絵本に触り、めく
り、引っぱり、時にはなめたり、
破ったりします。絵本は「本」で
はなくて、楽しいおもちゃのひと
つなのです。

赤ちゃん向けの絵本はイラスト
や写真が大きくハッキリしていて、
色も単純なものがいいでしょう。
食べ物や動物、乗り物など、身近
なもので、子どもの興味を引くよ
うなものが描かれている絵本がお
すすめです。

赤ちゃん向けの絵本は、絵だけ
で文字が載っていないものが多いの
で、お母さんの中には「これでは
読み聞かせられない」と思う人も
いるかもしれません。

最初のうちは、絵本をめくって
絵を見るだけでもいいと思います。
読み聞かせるよりは、遊ぶという
感覚を大切にしましょう。

絵本の筋に関係なく、「おっき
なワンワンだね」「おめめがパッチ
リしているね」と話しかけたり、

「ぼんぼん」「どーん」「ふわふわ」
「とんとん」などリズムカルな言葉
をつけてあげたりすると、赤ちゃん
はおもしろがります。
少し大きくなってきたら、言葉の
響きを大切にしながら、しっかりと
読み聞かせをしてあげましょう。
「大きな桃がどんぶらこ、どんぶ
らこと流れてきました」

「大判、小判がざつざつ」
このように、リズムカルな言葉
を繰り返す表現は、子どもも覚え
やすく、すぐに「どんぶらこ」とま
ねするでしょう。

お話の途中で、絵のほうに寄り
道しても構いません。「ちよつちよ
が飛んでるね」「赤い服と青い服だ
ね。靴とぼうしはおそろいね」など
と、子どもと言葉を交わしながら、
読み進めると、子どもは絵本をよ
り楽しめるに違いありません。

ただし、4歳になったら解説
を加えずに、絵本の文章だけを
読み聞かせるようにしましょう。
そのほうが、集中してひとつの
物語の世界を頭の中で構築でき
るからです。



5歳ぐらいになると、『大きなカブ』のように繰り返し文章を好むようになります。

子どものお気に入りの絵本が見つかった、「もう一回読んで！」とせがまれると思いますが、何度でも読んであげましょう。子どもにとって絵本との出会いはとてもうれしい経験。お気に入りの絵本ができるのは、喜ばしいことです。

ベッテルハイムという児童精神科医が、『昔話の魔力』という本の中である子どもの例を紹介しています。

その子どもは注意欠陥・多動性障害という症状があり、じっと座っていられずにうろうろと歩き回ったり、ちよつとしたことでもかんしゃくを起こす傾向がありました。いろいろな治療をしてもまったく効果がなかったそうです。

ある日ベッテルハイムが、病室に数冊の絵本を持って入ったら、その子どもは、ふつとこちらを見ました。そこで「読んであげようか？」と絵本を読み聞かせてみたら、ふ

だんは少しもじっとしていられない子どもが、じっと動かずに聞いていたのです。ベッドに座って絵を見つめ、ベッテルハイムの声にじっと耳を傾けていたそうです。

次の日も、また次の日も、その子は同じ絵本を選びました。

それから毎日同じ絵本を読み聞かせ、1か月経ってその絵本を味わい尽くしたのか、次の本に移っていきました。そのようなことを繰り返しいるうちに、その子どもはかなり落ち着いてきて、症状が改善されたそうです。本が治療の糸口になったのですね。

子どもは、同じ本でも、そこから受け取っている心の栄養は、毎日毎日違っているでしょう。昨日とは違った感触を味わいながら、毎日新しい発見をしているはずですよ。その本を卒業するまで繰り返し読み聞かせ、子どもの心に十分に栄養を与えてあげてください。

また、読み聞かせをするときは、テレビを消して、子どもがお母さんの声に集中できるようにしましょう。

何より絵本の読み聞かせは、お母さんと子どもが心を通わせるチャンスです。お母さんの声を聞きながら、絵本の世界へ入っていく。それはふたりだけで共有できる幸せな時間なのです。

* *

おわりに、これはまったくの余談となりますが、私自身のひとり娘の子育て経験を少しお話しさせていただきます。模範となるような子育てはしてこなかった私ですが、できるだけ心がけ、実行してきたことがあります。

それは娘に対して、幼い赤ちゃんのころからひとりの人として敬意を払い、大人に対するのと同じように、いやそれ以上に、その人格を大事にして付き合ってきたつもりです。共に人生を歩んでいく人として、より高いもの、より美しきものをひとり占めするのではなく、彼女と共有したいと願い、実行してきたように思うのです。そしてもうひとつ心がけたのは、

平和を願う心の涵養かんようでした。彼女には、二度と戦争を起こしてはならない、という願いをもち、平和な世界を築くことに努力を惜しまない意志をもてる大人になつてほしいと願い、思春期の頃には広島平和記念資料館や長崎の平和祈念館などを一緒に訪れました。親子とも、涙し、言葉もなく、ただただ戦争の悲しさと恐ろしさを前に佇む旅でした。

絵本の読み聞かせは、乳児期から児童期の終わりまで、ずっと続けてまいりましたが、平和教育につながる本は彼女の成長に応じて用意しました。小学校の頃には、松谷みよ子の『ふたりのイーダ』やアンネ・フランクの『アンネの日記』、さらに高校時代にはウィクトール・フランクルの『夜と霧』なども読み合い、話し合いました。

0歳の赤ちゃんから大人まで、誰もが楽しめる読み聞かせの時間を通じて、親から子へ、次の世代へ大切な心の栄養が受け継がれていくことを願ってやみません。